H－12　景観の変化から探る世界の水辺環境の長期的トレンドに関する環境社会学的研究

（3）多様な水文化主体間の環境コミュニケーションの育成手法に関する研究

有限会社　テラ　小林亜里
株式会社　環境総合研究所　大西行雄
京都精華大学人文学部環境社会学科　嘉田由紀子

〈研究協力者〉マラウイ大学チャンセラー校　ローレンス・マレカノ
元パリ国立自然史博物館　パトリシア・ペリグリーニ
レマン湖博物館　カリーヌ・ベルトラ
甲南大学非常勤講師　乾　清可
水と文化研究会　小坂育子
滋賀県新旭町役場環境課　阿部能英

平成14～16年度合計予算額　23，167千円
（うち、平成16年度予算額　7，329千円）

［要旨］

本サブテーマでは、サブテーマ（2）において作成したアーカイブ資料を、地球環境問題として重要性を増している淡水資源の管理に直接関係する各地の地域住民に提示をし、異なった世代や文化間での「環境コミュニケーション」の試験的な舞台づくりを行い、グローバルスタンダードがローカルコンテクストに出会う社会的プロセスの考察を行い、住民主体の自主的な環境保全政策に向かうための動機づけや、地域社会のエンパワメントへ活用するための基礎的研究を行った。社会経済状況の異なった条件の中から事例を選ぶために、先進国では日本（琵琶湖）、スイス（レマン湖）、フランス（セーヌ川）、中進国として中国（太湖）、途上国として、グアテマラ（アティトラン湖）とマラウイ（マラウイ湖）の6ヶ国を対象とする。その結果以下の4点について、今昔写真活用による効果がみられることが判明した。

①無意識的で言語化されていない生活環境の総体を知る効果
②調査する者とされる者の間に内在する権力関係の緩和効果
③社会による識字率の差を払拭するコミュニケーション効果
④生活環境変遷についての知識と経験の増大によるエンパワメント効果

［キーワード］環境コミュニケーション、世代間関係、コミットメント、エンパワメント、水環境改善

1．はじめに

文化的背景の異なる人びとの間のコミュニケーションには本質的な困難が伴う。さらに、急速に変容しつつある社会においては、世代間の情報や意思の伝達においてもやはり困難を伴う。

本研究のサブテーマ（1）でもみてきたように、過去50-100年間の地球規模での水辺環境の変

遷は人類がかつて経験したことのないような急激なものであり、水辺生態系の過去のありさまについては、その文化的固有性は語られることもなく、忘れられようとしている。固有文化への配慮なしに、新しい技術や制度が導入される具体的な場面では、本来の住民の意向を問うことはきわめて少ない。よしんば問うたとしても、その「問う」という場面における住民と外部の技術者や行政との間の情報共有と意思形成の方法の未熟さから、地元の意志や意向にそぐわない不適切な技術や制度が導入され、結局は維持管理ができず、放置される、という問題が生まれてくる恐れがある。

さらに、固有文化の問題は、途上国だけでなく、先進国においてもみられるものである。特に農業や漁業など、一般に遅れていると思われている職業や、都市・農村関係の中に、権力的様相は入り込んでいる。そして、生活条件が異なる時代に生まれた人びとの間での世代間のコミュニケーションも困難をともなう。

2．研究方法

そこで、本サブテーマでは、異文化間や異世代間では、本来的にコミュニケーションは大変困難である、という前提から出発した。特に水環境問題は、物質的な問題、生態的な問題、そして心理的な問題とたいへん文脈依存的な状況の中で、意思形成が求められる。本研究ではそれを、記号的に解釈される「社会的表象システム」と生活の中での五感に基づく「評価システム」のずれ、としてとらえた。表象システムと評価システムの間には、よしんば同じ「きたない」という言葉を使っていても全く異なる場面や評価に根ざしていることさえある[1)]。

そこでここでは、サブテーマ（1）で収集した今昔写真をサブテーマ（2）により開発したモバイル対応の画像データベースに変換し、それらを活用しながら、具体的な水環境問題の現場での異なった世代間や文化間でのコミュニケーションのあり方を現場に即して見ることからはじめた。具体的には、経済発展の違いなどによって上記6つの地域を選び、地域社会での小グループによるFocus Group手法や、学校や地域自治会による子どもたち自身による地域内での個別インタビューなどを用いて「水に関する記憶」を発掘し、そこから「望ましい水辺景観」のイメージの抽出を行った。さらに都市部で、個別のディープインタビューの困難な地域では「街頭インタビュー」を企画し、社会意識を探った。

と同時に、収集した今昔写真を地域での写真展示会やカレンダーなどの写真資料として作成し、それらへの人びとの反応もあわせて検討した。特に、改めて問うてみることなくあたり前に存在してきた身近な水辺の変遷の意味を自覚化し、さらにそれをポスターやカレンダーなどにより自己表現することで、地域社会のエンパワメント効果がどうなるか、その可能性をさぐった。さらに、2003年3月の世界水フォーラムにおいては、その途中の活動経過を報告した。国際会議においては、若者や子どもたちは、自分たちの活動を発表するだけでなく、他の地域の取材をし、その報告を特派員として新聞などをつくり表現することにした。

さらに、水フォーラムに参加をした海外の人びとを琵琶湖周辺の村落に招待をし、そこでは今昔写真を中心とした国際交流の場面を設けた。さらに2003年夏には、世界水フォーラムに参加したアフリカの子どもたちの村落を訪問し、そこでの水問題の調査を子どもたちと行いながら、地元での浜辺展示会を開催した。さらに2004年春には、再びアフリカの子どもたちを日本に招待をして、望ましい水環境を村落の若者や子どもたちがつくりあげていくための国際ワークショップ

を開催することによって、日本の研究者や技術者からの支援の仕組みが形成されはじめた。

日本とアフリカにおける上記のような対話と交流の舞台づくりとあわせて、スイス、フランス、中国、グアテマラでは現地において、資料提示型のアンケート調査などを行った。

以下、それぞれの具体的な研究内容を紹介しよう。

(1)日本（琵琶湖）

日本では琵琶湖周辺の昭和20年代から30年代の古写真を地域や博物館で発掘し、それをもとに、湖西の新旭町（現在の高島市）をモデル地域として、世代間の環境コミュニケーションを促進するためのグループづくりを2002年度から行った。名称は「世代をつなぐ水の学校」として町内に広く募集をかけ、高齢者5名、小学生12名が志願をし、毎月一度の水の環境変遷を探るための活動を行った。そのひとつは古写真をもって、高齢者と一緒に現場へ行き、今の写真を子どもたち自身が撮影をして、高齢者に聞き取りを行う、という方法を採用した。たとえば、**写真1-1**は昭和初期の琵琶湖岸の舟の桟橋であり、現在、湖上交通はなくなり杭だけが朽ちて残っている（**写真1-2**）。

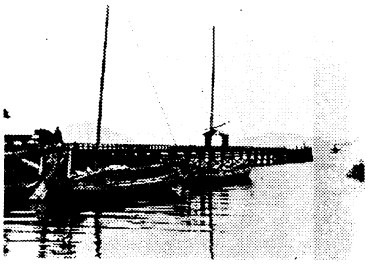


写真1-1

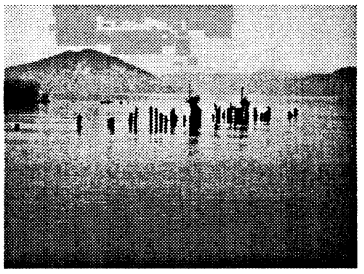


写真1-2

写真1-3

そこを取材した子どもたちは、この地域に暮らしていてもそれまで自分たち自身が水辺の杭の存在に気づいていなかったことなど、過去の水辺の暮らしぶりに新鮮な驚きをもってのぞみ、記録した。そして、デジタルカメラで今の記録を撮影し、今昔比較写真の資料も作成した。今は陸上交通しか意識のない子どもたちであったが、かつては舟に乗って大津などへも行ったことをお年寄りから聞き、自分たちも船にのってみたいという希望がだされた。この希望は、この夏、琵琶湖沖合いへ環境セミナー船にのって出ることで実現した。

さらに、今は水道があり、蛇口があるのがあたり前の中で、「もしも蛇口がとまったら？」という企画に基づき、そのための小冊子を独自につくり、水道が昭和40年代にひかれる前の新旭町の飲み水のとり方、洗濯の仕方などを探る活動を行った。そこでも、洗い場やわき水などにまつわる古写真を探し、昔の水利用の場面が残っている場所を訪問し今の写真を撮影するなかで、水利用の工夫などについての聞き取りをした。ここでも、日常通り過ぎて、見過ごしてしまっている水路がかつては飲み水をとる川で（**写真2-1**）、飲み水は朝早く、女性がバケツで運んだこと、洗濯は日が高くなってから川でしたが、おむつなどの汚れ物はタライにとって、決して川に流さなかったことなどがお年寄りの口から子どもたちに伝えられた（**写真2-2**）。子どもたちは自分で写真を写し、その今昔比較資料を作成した（**写真2-3**）。高齢者自身も、自分たちが忘れていることを、写真をみて、現場にいくことで鮮明に思いおこすことができた、「写真があるといろいろ思いだすのでうれしい」と口ぐちに言い、また月1回の子どもたちとの交流を生活の張り合いとしてくれる人もでてきた。

写真2-1

写真2-2

写真2-3

昔を知るお年よりと古写真をもって、現場を訪問し、その変化を一緒に確認した後、皆で写真を会議室に持ち帰り、そこでデジタルデータから写真プリントを行い、地図の上に貼り付けて、「新旭、水の地図」を作成した（**写真3-1、3-2**）。ここには、今も村内にたくさんわいているわき水写真も張り込んだ。この作業の中で、子どもたち自身がコンピュータの操作を学び、お年寄りが、子どもたちに機械の操作を教わる立場であった。そして、ここで作成した地図をもって、2003年1月に滋賀県内で、2月に京都市内で開催された子どもと水の催しに参加をし、そこで新旭の子どもたちは「もしも蛇口がとまっても、新旭にきてください。わき水がいっぱいあります」と自分たちの地域のわき水自慢を行った（**写真3-3**）。

写真3-1

写真3-2

写真3-3

さらに2003年3月の第3回世界水フォーラムにあわせて開催された世界子ども水フォーラムには32ヶ国から109名の子どもたちが参加をして「衛生的な水の確保」「学校における水」「水の災害への対処の方法」「自然や文化と水」という4つのテーマで討論が行われた。

それにあわせて、新旭町の水路、伝統的な住居における自噴井戸（わき水）や便所などの見学をかねて、1泊2日の泊まり込み訪問を企画したところ、13ヶ国40名が参加をした。マラウイ、ケニア、チャド、モザンビーク、アンゴラ、スーダンのアフリカ諸国、ネパール、タジキスタン、ラオス、カンボジア、中国のアジア諸国、USA，ギアナである。この子どもたちは、地面から止めどもなくあふれる自噴のわき水をみて歓声をあげ、さらにそれが皆飲めると聞いてさらに驚きの声をあげた。その上、家の中には町営の水道がひかれその水も飲めること、また便所はきっちりと大便と小便でわかれ、肥料として使われていることを村の人から聞き、さらに驚きの声をあげた（**写真4-1、4-2**）。

ネパールのシミットラさんは、「上水が飲めるのは行政がしっかり自分の仕事をしているから、わき水が飲めて水路がきれいなのは、住民がしっかりと掃除をして守っているから」といい、「自分の国にはどちらもない、ここは水のパラダイス（天国）だ」とうらやましがった（**写真4-3**）。マラウイから来たジョンくんは、自分の国は便所をつくる家が少なく、それがし尿による水汚染

を招いていること、新旭ではし尿を畑の肥料に使う家もあることを知り、マラウイにかえったら便所づくりを進める若者グループを組織化したい、と約束した。

海外からの子どもたちが自分たちの村の水を「天国」と言ったことで、新旭の子どもたちはより一層、その大切さがわかったようだ。「わき水、新旭の宝ものやな」とYちゃんはつぶやいた。古写真で見てきたような自分たちの地域のお年寄りが経験した生活スタイルは決して過去のものではなく、今、地球上で現存しており、しかも自分と同じような年代の子どもたちがお年寄りの子ども時代と同じような暮らしをしていることを改めて発見することになった。「世代をつなぐことは世界をつなぐ」ことを実感できる交流場面であった。

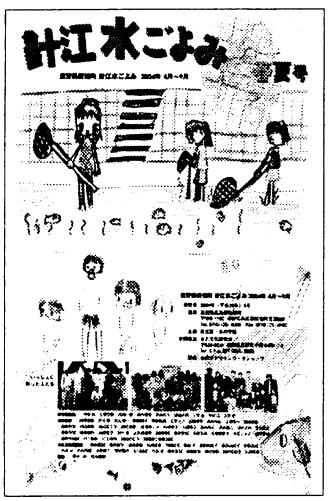
写真4-1

写真 4-2

写真4-3

さらに2003年度には、「新旭、水の地図」のポスターの限界が議論された。つまりポスターは数が少なく、多くの人に公民館などで見てもらうには都合がよいが、それぞれの家で、日常的に見てもらうには限界ある、何かいいアイディアはないかということで、提案されたのが本研究プロジェクトですでにグアテマラでなされていた「地域の水カレンダー」である。

メンバーの意見をいろいろ寄せながら、たくさんの写真をいれられて、頻繁に見られるように、ということでカレンダーを町内の1集落である針江を舞台に作成した。これは、「針江・水ごよみ」と名づけ、子どもたちと地域の自治会メンバーと共同で1,000部作成し、地域住民や関係団体に配布した（**写真5**）。カレンダーは週めくりとして、できるだけ沢山の写真が収録できるようにすると同時に、地域での行事や活動予定（川の草刈り日など）を掲載し、コミュニティとしての特色を強調した。そこが多くの人たちの共感をよぶ結果となった。



（平成16年）5月11日（火曜日）（毎日）　地域ニュース　第1ページ

水と暮らしの文化を満載

針江水ごよみ

NGOと住民制作

水をめぐる地域の文化がわかる「針江水ごよみ」

水循環と地域の暮らしの関係などを調べているNGO（非政府組織）「水と文化研究会」（代表、高田良子・京都精華大教授）と新旭町、同町針江地区の住民らが、同地区の水と暮らしのかかわりなどを通じたカレンダー「針江水ごよみ」を共作した。地域住民に親しいカレンダーには、水にまつわる地元住民の生活・文化がふんだんに盛り込まれ、評判を呼んでいる。　【宮部正浩】

針江地区はわき水が豊かで集落が形成されている。家の中にあるわき水の利用場で、「水ごよみ」は地区所「ひばた」（マ魚の産卵の人々子どもたちが集っ）に好条件の水路の田（ライタ）（マ川や森の清流を動マ夏祭りの川開マ用途によって使い分けられる洗いカゴ）など、水と密接に結びついている西地区と暮らし、その中ではぐくまれた知恵などを表現した。

水と文化研究会は98年発足。京都周辺の滋賀で住民に水とのかかわりを聞き取りした「水環境・カルテ」調査、アフリカ・マラウイ湖と周辺住民の関係の調査などを通じ、水と人の生活のかかわりから生まれる精神文化の探究を続けている。

問合せは広年、新旭町の教育事業の一環として「民をつなぐ水の学校」という取り組みを開始。小学4年～中学3年生を対象に、針江地区など町内で、わき水探し、水の使い方お年寄りに聞くなどしている。その成果を、カレンダーという形にした。これまで気付きにくかった、水とのかかわりを通即することができた地域の人たちは「自分たちの活動がよく分かる」「わくわくする」などと、喜んでいるという。

問合せ事務局の小佐野子さんは「町村合併が進む中、小さな地域の重味が問われていると思う。地域教育の文化をテーマル発信したい」と話している。問い合わせは西研究会（077・594・2255）か西町環境（0740・25・8000）。カレンダーは1000円。

写真5

また湖西の今津中学校では、「よみがえれ写真たち」というタイトルで、150名をこえる中学生に呼びかけ2003年度、2004年度の2年にわたって、総合学習を行った。それぞれの年度とも4－5名ひとつのグループとして、45のグループをつくり、昭和20－30年代の古写真を選んでもらい、それぞれに今の場所を探し出し、そこで昔をよく知る人びとに聞き取り調査を行い、地域の環境変遷をたどるという総合学習を企画した。グループ毎に報告書を作成し、相互の発表会も行った。「昔の水泳」（**写真6**）、「貫川内湖」（**写真7**）、「中沼」（**写真8**）、「湖岸の足げた」（**写真9**）の3つのグループ発表を掲載する。

写真6

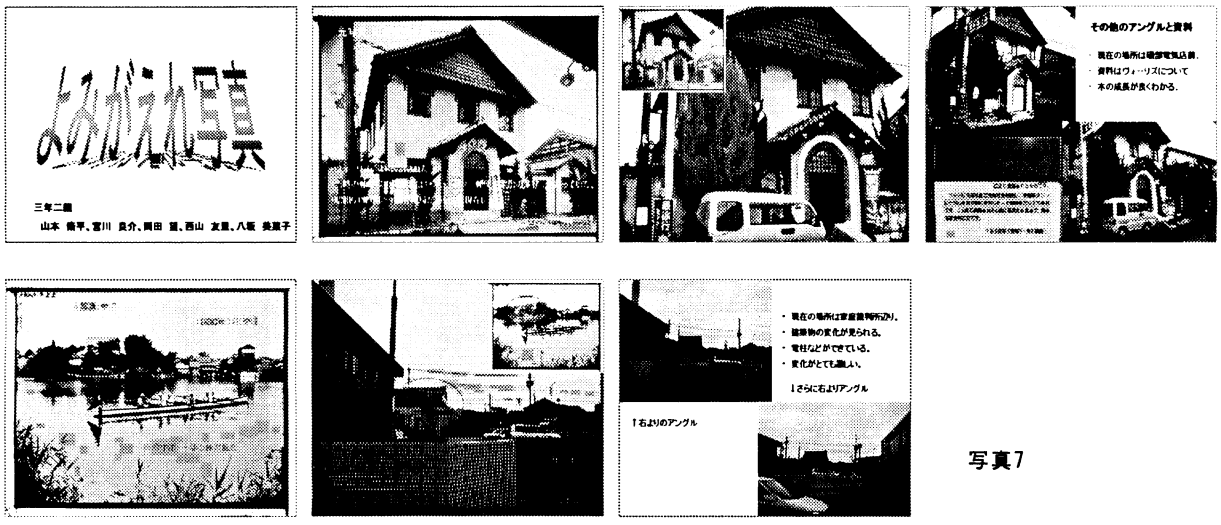


写真7

昔の浜の水泳を調べた男子学生Ａくんは「昔の今津は今と違い、生き生きしていて、びっくりしました。人としてしっかりしていたことがよくわかりました。それと、昔は泳げるほど琵琶湖がきれいということにもびっくりしました。昔は物資的には貧しかったけど、今では無いような大切なものが人々の心にはあったと思います。調べたことを生かして、これ以上琵琶湖を汚さないようにしたいし、少しでも昔の琵琶湖に近づけたいと思いました」と述べている。Ａくんがとりあげた写真は昭和10年代の男子学生のふんどしの水泳の姿であるが（**写真6**）、これを見て「人としてしっかりしていた」という評価をしていることが、今回のようなコミュニケーション手法のひとつの成果といえるだろう。つまり、ふんどし姿ですっきりと浜辺に立つ若者のりりしさという視覚的文脈が、このような発見をうながしたと推定される。

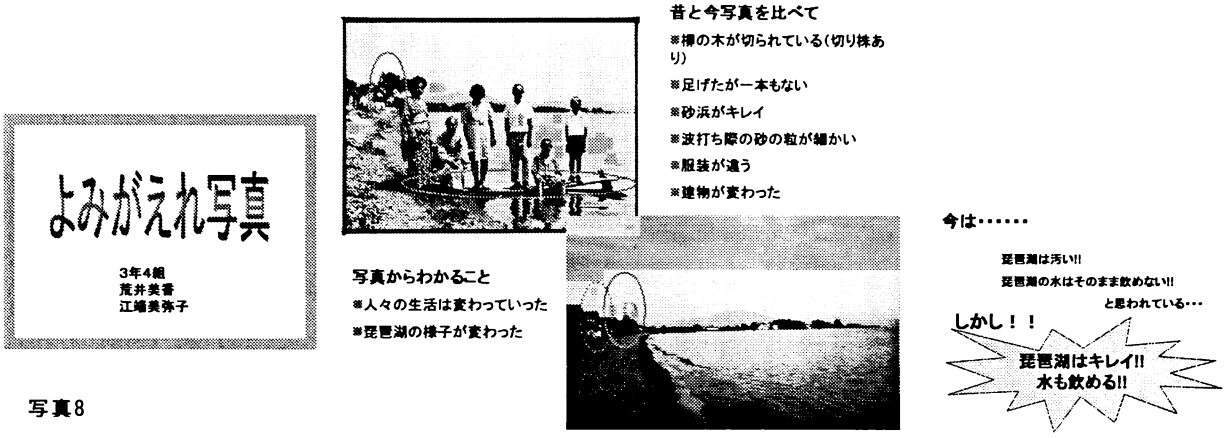


写真8

ここに掲載したもの以外で、戦争中に湖岸のサンバシから出征兵士を見送る写真をとりあげた女子生徒Ｂさんは、「写真一枚でこんなにいろいろなことがわかるとは思わなかった、インタビューでここまで聞き出せるとは思わなかった」と述懐していた。

また別の男性生徒のグループは昭和40年代まで内湖だった沼が今は埋め立てられて裁判所などの公共用地になっていることに大きな驚きを示し「町の人のためには裁判所なども必要だけれど、本当に沼を埋め立ててしまってよかったのか、あらためて考えさせられた」とむすんでいる（**写真7**）。

さらに琵琶湖岸に「足げた」と地元の人たちが呼ぶ洗いもの用のサンバシがかつてあったことを発見したBさんたちは（**写真8**）、「足げたでは洗濯や米とぎ、風呂水くみ、お茶の水くみ、野菜洗い、何でもしたことにおどろいた。水道なしで生活できたんだ」と感嘆し、当時の琵琶湖や水使いの様子だけでなく、子どもの家族員数は多く、生活はけっして楽ではなかったけれど、水や水辺は美しく、魚もたくさんいたことを知った。そして何よりも湖辺に人がたくさんいてにぎやかなことを知り「もっともっと人が湖と近づけるようになったらいい」といって、足げたを再び取り戻そう、という提案もしている。

さらに今津中学校の生徒の2年にわたる今昔写真による環境調査活動で、多くの生徒が、高齢者の人たちが生活の上で多くの知恵と知識を持っていて、それが生かしきれていないこと、そして、このような写真を持って昔の話を尋ねまわることで、「よみがえったのは写真だけではない、お年寄りが元気にいきいき話しをしてくれた」という発見をした生徒もいた。

今後、ここで今昔写真調査を行った小学生や中学生がどのように成長していくか、それは未知数ではあるが、少なくともそのプロセスにつきあった高齢の人たちが、この動きに刺激されはじめたことを意味があるだろう。そして新旭町をふくむ高島市では、2005年度になって、地域まるごとエコミュージアム構想の中で大学生を含めた写真調査が企画されようとしている。

(2) 中国（太湖）

中国の太湖は、北部の北京と比べると降雨量も多く、また大河長江の再下流部でもあり、蒸留の水や栄養分を集め、昔から豊かな水郷地帯となってきた。しかし近年の経済成長の中で急速に都市化、工業化が進み、水と人のかかわりは大きく変わりつつあり、その変遷についてはサブテーマ（１）で詳しく述べたが、このサブテーマでは、このような水辺の変遷を人びとがどう意識しているのか、今昔写真を活用したインタビュー調査を行った。**写真9**と**写真10**はその場面を紹介

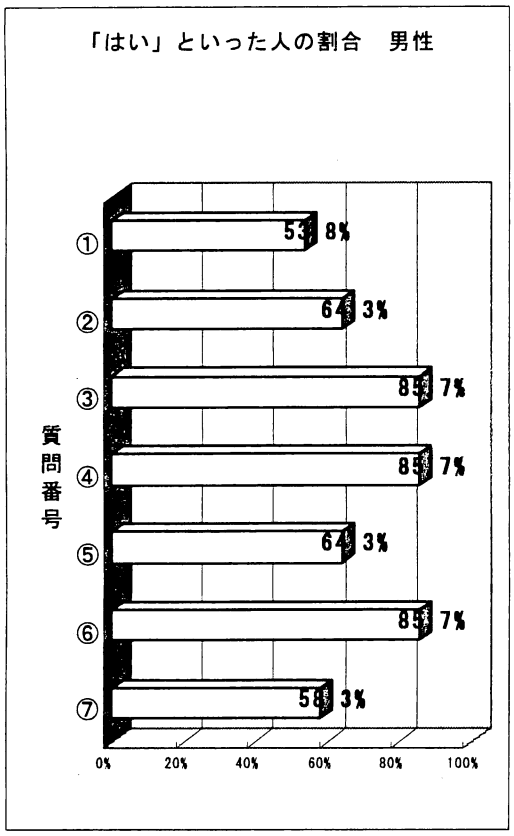
してある。今昔の風景の評価はサブテーマ（1）で概観した。ここでは人びとの水とのかかわり意識について、紹介してみよう。

写真9-1

写真9-2

写真10-1

写真10-2



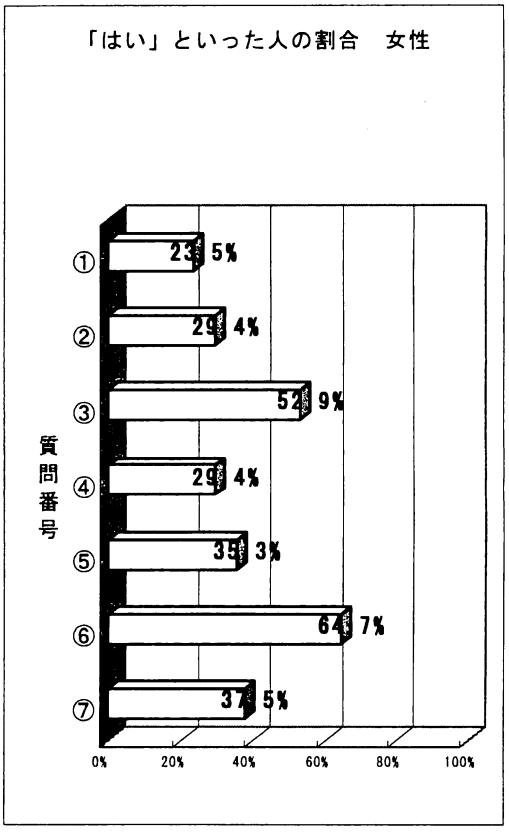


図4　水利用行動を今の湖辺で行うかどうか左：男性（15名）、右：女性（17名）

図4には、①五里湖の水を飲む気になるか、②魚をとる気になるか、③とった魚を食べる気になるか、④泳ぎたいか、⑤自分の子どもを泳がせるか、⑥自分の子どもを遊ばせるか、⑦洗濯する気分になるか、という5項目についての「想定質問」を行った結果を示してある。左は男性、右が女性である。

五里湖での行為レベルでの水とのかかわりに許容度については、男性の方が女性よりもはるかに許容度が高い。とった魚を食べる気になるか、泳ぎたいか、という質問には男性の85%がそれぞれに可能と返答している。子どもを遊ばせるか、という質問にも男性の85%が許容している。

魚を食べる気になる、という方が釣りをする気になるか、というよりも許容度が高いのは一見奇妙に見えるが、釣りはしない、あるいは嫌だが、魚は食べる、食べたいという回答が数名いたからだ。釣りが嫌、というのは釣りが嫌いという意味も含まれている。次に許容度が高いのが、魚を釣る、自分の子どもを泳がせる、それから洗濯をする、ということになる。水を飲む気になるかは最も低く、それでも男性の半分以上、53%が許容している。これは「煮沸をする」ことを前提にしているが、男性のうち一人だけは、煮沸しなくても飲めると回答した。元養魚場で働いていた人だった。

一方女性についてはすべての行為項目で男性よりも許容度が低くなっている。特に低いのは「飲む」「魚をとる」「泳ぐ」であり、ついで「自分の子どもを泳がせる」「洗濯する」である。許容度が高いのは「魚を食べる」と「自分の子どもを遊ばせる」である。女性も男性と同様、魚を食べることに対する許容度が高いのは、中国文化における魚食文化の特色といえるだろうか。日本では水俣病のように、水質の汚染が魚に直接結びつくという公害を経験していないからともいえるかもしれないが、日本との比較など今後の課題といえる。

(3)スイス（レマン湖）

100年前と酷似する景観を維持してきたレマン湖辺で、建物の維持以上に驚かされたのは、ブドウ畑に囲まれた村の景観であり、その景観の裏にある世代を越えた継続への意思と工夫だった。それを見ることなしに、景観の評価をすることはできない。そこで、今昔写真をたずさえて、レマン湖博物館の学芸員と共同で、サン・サフォラン村の聞き取り調査を行った。

写真11-1

写真11-2

写真11-3

まず、サン・サフォラン地区のリヴァ村でブドウ畑の経営をするモナションさん（Monachon）であるが、100年前の写真を見ながら、自分の家の7代にわたる系譜とともに、日常生活様式の変容を語ってくれた（**写真11**）。具体的には、建物やブドウ畑の景観が同じように見えても、その背景には、隠れた見えない変化がある、ということをモナションさんは強調していた。ワイナリーの内部は金属機器が取り入れられ、自動化された瓶詰め機械も導入された。祖父の世代までは、自分達が食べる野菜は自分達で作り、日曜日は山に燃料の木を取りに行くという自給自足の生活をしていたから良かったが、現在はその当時の3倍働かなければ家族が養えないという。

サン・サフォランの教会近くでは、複数の若者へのインタビューを行った。ワインを飲みながらスイスの建国記念日を楽しんでいた6人の若者グループは、私達に突然話しかけられ、最初は距離を保っていた。しかし「今昔写真」のブドウ畑の風景を見せると写真に見入り（**写真12-1**）、100年前と風景は変っていないがその内側には木製の貯蔵樽が温度調節付きの鋼鉄製になったことや、人力だった作業の多くが機械化されたといような技術的な変化が隠れていることなど、次々

に述べてくれた。私達が特にブドウ畑に興味を持っている事を知り、グループの中の1人、ベルナルド・シュバリーさんが自宅で自分のワインの味見をするよう誘ってくれた（**写真12-2**）。シュバリーさん宅の近くには、中世の時代から使われてきたわき水を利用した水飲み場があり、美しく飾られていた（**写真12-3**）。「土地から離れない水」が今も大事に生きている。

現地を歩いて古写真を提示しながらインタビューをすることにより、100年前と同じように、のどかで美しい風景の内側には、昔から続く重労働や、現在の生き残りをかけた経済競争と現在向き合っている厳しい現実が隠れていることがブドウ農家の人たちから語られた。レマン湖周辺のブドウ畑を風景として表象的に見る側と、生活システムを日々維持しなければならない側の隔たりの大きさが発見されたことは、この調査方法がもたらしたものといえるだろう。

写真12-1

写真12-2

写真12-3

(4) フランス（セーヌ川）

サブテーマ（1）でもみてきたように、セーヌ川の景観の建物構造などは過去100年間、大きな変化はみられないが、川岸の市場や洗濯場や子どもの姿など、生活との関わりがここ100年の間に急速に失われ、セーヌ川は車と観光客に占拠されつつあった。夏でも経済的理由などでバカンスに行けない市民のために、2002年からパリ市長の提案で始まったのが、パリ・プラージュ（ビーチ）である。私たちは、2003年8月にパリ・プラージュに集まった老若男女42名を対象にして、古写真を提示しながら、彼らのセーヌ川への「評価システム」がどのようになっているのか、聞き取り調査を行った（**写真13-1、13-2、13-3**）。突然見知らぬ人から呼びかけられるという状況での調査であったが、古写真を示しながら「100年前、セーヌ川はこうだったんですよ」と口火を切ると、ほとんどの人たちが、写真にのぞきこんで興味をもってくれた。そこでの質問項目は、セーヌ川に関しての「飲む」「子どもが遊ぶ」「ペットが遊ぶ」「洗濯をする」「洪水にあう」の5項目であり、それぞれに関連写真はサブテーマ（1）に示してあるのでここでは省略したい。

←**写真13-1**　↑**写真13-2**　**写真13-3**

私たちは過去にもセーヌ川の川べりで水に関する聞き取り調査を企画してきたが、他者にはできるだけ関与しないという生活意識の強いフランスにおいて、直接に川べりで「お話聞かせてください」と言ってもとりつくしまのない状況が多かった。それに対して、今回の古写真を活用した調査では、たとえこちらが外国人であっても、「セーヌ川の100年前の写真があるんです。この変化をみてどう思われますか」と呼びかけるととたんに打ち解けてさまざまな思いを語ってくれるという効果を実感できた。ここでも、昔、子どもがセーヌ川で泳いでいた写真をみてもらって、「あなたはセーヌ川で泳ぐか？」、ペットが泳いでいる写真をみてもらい「自分の子どもやペットを泳がせるか？」、昔の洗濯場の写真もみてもらって「洗濯をするか？」、1911年にセーヌ川が溢れた水害の写真をみてもらって「もしあなたがセーヌ川ぞいに住んでいたとして、洪水を恐れて川べりから引っ越すか？」という質問を試みた。夏の川べりで10日間をかけて、男性21名、女性21名、合計42名に聞きとりをした。年齢は男性が11歳から71歳、女性が11歳から74歳であった。

その結果をひとまとめにすると「川との接触を拒否する」という姿勢であった。泳ぐかどうかという質問には60歳以上の男性ひとり、女性ひとりだけが「泳いでもよい」と回答したが、残りはすべて、「泳ぎたくない」という回答であった。理由は「汚い」が28名、「船が危ない」が10名、「シラク大統領が泳がない」が3名であった。数年前にシラク大統領がセーヌ川をきれいにする、という政治的約束をしたらしく、そのきれいになった証には「自分が泳ぐ」と公言したという。その公言が果たされていないから、きっとまだ泳ぐまでにはきれいになっていないのだ、というイメージをもっている、という回答であった。

自分が泳ぐのが嫌ならやはり子どもも泳がせたくはないだろう。「子どもを泳がせるか」という質問にも上と同じ数の回答がなされた。ペットでさえ、女性の10名（半数）、男性の9名は反対している。

「水道が止まった場合、セーヌ川の水で洗濯をする気になるか」という質問には無条件で洗濯可能と回答したのは女性1人、男性2人でいずれも60歳以上であり、残りはすべて「ノン」であった。そこで次に何らかの条件を質問したところ、「煮沸をして」が5名、「水をフィルターにかけて」が3名、「洗濯後アイロンをかける」が2名であった。セーヌ川の水をどうしても使いたくないという人は、「ボトル水で洗う」が6名、「ジャベル水（ジ亜塩素酸ナトリウムの漂白殺菌剤）で洗う」3名、「コインランドリーを使う」が5名、「新しい服を購入する」が3名であった。

ところが、「もしあなたがセーヌ川ぞいに住んでいたとして、洪水を恐れて川べりから引っ越すか？」という質問に対しては、42名中30名の人が「住み続ける」と回答し、残り12名が洪水があるなら引っ越すと回答した。住み続けるという意見に対しての理由をあげてくれた人の中では「景色や場所がいい」が最も多く11名であり、ついで「洪水の頻度が低い」が8名、「今は洪水調節されている」が5名、「洪水は楽しい」が1名、「人間には恐怖が必要」が1名であった。

このようにみてくると、セーヌ川は、自分は泳ぐのも嫌だし、洗濯をするのも嫌だが、見るための景観的価値は高いと評価され、たとえ洪水がきても「川べりに住みたい」という願望を持つ人が多いということが示されたといえる。

近代は「見る」ことを強化した、とマクルーハンは主張したが、まさにセーヌ川の20世紀の100年の人と川のかかわりの歴史は「見ることに特化」してきた世紀といえるだろう[2)]。

(5)マラウイ（マラウイ湖）

マラウイについては、1940年代の湖辺の植生、漁業の状態、生活の有様など、150枚の古写真が収集された。幸い、撮影場所はおおむね特定できたので、それらを持ってできるだけ近い地域を訪問し、写真を素材としたFocus Group 調査を行った（**写真14-1、14-2**）。ここでは世代間のコミュニケーションを促進するために、できるだけ高齢者と子どもとが同じ場面での会話が促されるような場面設定を行った（**写真14-3**）。

写真14-1

写真14－2

写真14-3

まず自分たちが暮らしている場所の昔の写真にはほとんどの人たちが大変強い関心を示した。そして、口ぐちにおしゃべりがはじまる。その記録はテープで録音し、文字として残す。その具体的な内容の一部は、サブテーマ（1）で紹介した。これらの写真を持ち込んだ調査でもっとも重要な発見は、あくまでもその土地の過去を当事者から語ってもらうという舞台設定が、調査者と被調査者という関係性に内在する権力関係を逆転しうる、という点である。つまり「語りの主導権」は地元の人たちにある。そして、外人部隊が外部的な関心から発する疑問ではなく、内在的な関心からの発話行為が可能となる。このことが、ともすれば、専門家やよそ者の視点で発せられる疑問を止揚し、あくまでも地元の生活経験と生活実態に即した疑問の提示を可能とする。

2003年京都、滋賀、大阪で開かれた世界水フォーラムの折には、マラウイの調査地であるチェンベ村からは17歳の少年が参加をした。彼は、上述の滋賀県、新旭町を訪問し、そこでの水使い、地域共同体の役割、そして何よりもし尿を肥料に利用する日本の習慣の合理性に感動したようだ。そしてマラウイに帰国したあと、村の仲間と古写真による聞き取り調査を行い、同時に村内の水環境や衛生状態を改善するグループの組織化を始めた。

さらに2003年度と2004年度には、2年にわたり、地元の漁業者や、若者たちと一緒に、聞き取り調査の結果を写真とともにポスターとしてとりまとめ、浜辺での展示会を行った（**写真15－1、15－2、15－3**）。この展示会には、500名以上の村人たちが集まり、自分たちの地域の生活環境や暮らしぶりが写真として表示され、ポスターにまとまっていることに大変興奮していた。と同時に、自分たちの暮らしぶりの中にひそむトイレ問題、食料問題、化学肥料問題が相互につながっている、ということにも関心を示し始めた。とくに食料をあずかる女性たちの関心が高かった。

この若者たちの中から、水環境保全のために有効なトイレを作成するグループ（ウコンドグループ）が形成され、彼ら独自の便所づくり運動が始まった。そしてこの中から3名の代表が、2004年3月に私たちが主催をした、「エコトイレを考える国際ワークショップ」に参加をし、日本におけるエコトイレの技術や制度を学ぶとともに、滋賀県・新旭町の農家を訪問して、日本の昔のし尿処理や水利用の実態について学んだ。またこのような流れが実を結び、2004年4月には、チェン

べ村の小学校が、日本の草の根資金供与を受けて、し尿利用型のエコトイレの建設を始めるきっかけとなった。

しかし、この動きはまだまだはじまったばかりで、今後の方向を見守る必要があるだろう。

写真15－1

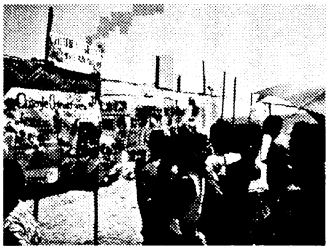


写真15－2

写真15－3

(6)グアテマラ（アティトラン湖）

日本ラテンアメリカ協会では、数年前からアティトラン湖の環境保全をめざして、住民活動のグループ化をすすめてきた。その中から、古谷桂信さんらにより下記の情報が提供された。古写真をもとに今の場所を探し、その環境変化を地域の人たちとともにたどることで、地域の人たちの湖環境への関心は飛躍的に高まったという。写真をもとに聞き取り調査を行い（**写真16-3**）、その結果をまとめて、2002年には写真展を開催した。会場にはあふれるほどの人が集まり、じっと見ている人が多かったという（**写真16-2**）。考えてみれば、自分たちが日常見慣れている風景や生活場面が写真になる、ということが何よりも関心をひいたという。さらに、2003年用のカレンダーを今昔写真によって作成し、地域の人たちに配布をしたところ大変な人気であったという（**写真16-1**）。今、この町では、住民による水草の保全、湖岸清掃、地域のゴミ清掃など積極的な環境保全活動が進展しつつあり、その活動の中で、今昔写真による記録づくりは、地域の人たちの湖や地域の歴史への愛着を育むために大変有効であるという。

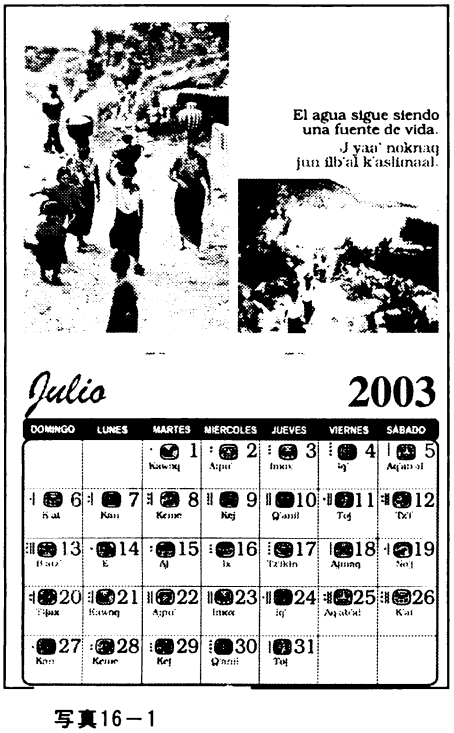


写真16－1

写真16－2

写真16－3

3．本研究により得られた成果

多様な水文化を担う主体間での環境コミュニケーション促進のために、今昔写真の活用はどのような効果があるのか、本サブテーマでの課題に対しては、以下のような成果が得られた。

(1)　無意識的な言語化されていない生活環境の総体を知る上での有効性

人と自然の関係性は、個別地域に固有な生態的空間的条件の中に埋め込まれている。しかもその埋め込みは無意識的で言語化されていない当事者にとっては「あたりまえ」の状態といえる。この「あたりまえ」の感覚は、いわゆる文字に頼らない世界だけでなく、古くから文字教育をうけてきた日本、フランスやスイスなどの先進国においても、共通することがわかった。つまり、「ハビトゥス」（生活習慣をつくる構造）への接近を可能とするひとつの調査手法といえる。

(2)　調査する者とされる者の間に介在する権力関係の軽減効果

地元の写真を対話の中で活用することで、調査者と被調査者という関係性に内在する権力関係を幾分なりとも軽減できる可能性を秘めている。そのことにより、外部の人間に語ることがはばかれる伝統や、あるいはコンプレックスの中で語ることを避けられている生活文化などについて、語りだすことができる。そして、外の人が外部的な関心から発する疑問ではなく、内在的な関心からの発話行為への糸口になりうる。このことが、ともすれば、専門家やよそ者の視点で発せられる疑問を止揚し、あくまでも地元の生活経験と生活実態に即した疑問の提示を可能とする。このような状況も途上国だけでなく、先進国でも共通であった。

(3)　識字率の高低の差を払拭するコミュニケーション効果

多くの途上国では、一般に識字率は決して高くない。特に女性や子どもなど、水辺の生活活動の中心である人たちの識字率は低い。また日本国内で、農林水産業などに直接従事してきた人たちは文字による生活表現には必ずしも馴染みがあるとは限らない。しかしそのような立場の人たちの生活記憶こそ、健全なる水環境の保全には意味がある場合も多い。そのような社会状況の中で、写真によるコミュニケーションは喜びと楽しみをもって受け入れられるメディアであることも判明した。この写真を活用した地域カレンダーや、地元での展示会などは、新たな地域発見への糸口となり得ることもわかった。

(4)　生活環境変遷についての知識と経験の増大によるエンパワメント効果

生活環境の変遷を、異なった世代間で直接的に伝達することで、上の世代にとっては、過去の確認、下の世代にとっては、多様なライフスタイルの可能性をイメージさせる。そして、自文化に対する愛着と、実践的行動に対するエンパメントの源泉となる。今回今津中学校と新旭の子どもグループにおいて、このことが浮かび上がってきた。

今昔写真を介した世代間のコミュニケーションは、以上のような社会的文化的効果を確認することができたが、この限界もあわせて指摘しておきたい。特に過去の写真については、どこでも入手可能なものではなく、むしろ希有な存在でもある。その資料の限界性もわきまえておきたい。さらに、写真のコミュニケーション促進効果は、写真のみを机上で利用するのではなく、写真と

現場を有機的につなぐことで、より多くの効果が得られる。世界の子どもたちが、今と昔、途上国と先進国の状況をクロスさせながら水問題や水文化について語り合った事例は、今後の異文化コミュニケーションに多くの示唆を与えてくれたといえる。マラウイ湖辺のチェンベ村から滋賀県を訪問して日本農村の過去の暮らしぶりを学んだジョン君は、京都でのシンポジウムで、「私は滋賀の農村のあるおじいさんからいろいろ学んだ。日本の子どもたちも是非ともそのおじいさんを訪問してほしい」と言っていた。世代と世界をつなぐことが、交錯する現代社会を生きていくための政策的知恵の働かせどころともいえるだろう。今と昔、途上国と先進国の状況をクロスさせながら水問題や水文化について探りあった事例は、今後の異文化コミュニケーションに多くの示唆を与えてくれたといえる。

4．引用文献

1) 嘉田由紀子『水辺暮らしの環境学―琵琶湖と世界の湖から』昭和堂、2001年。
2) マクルーハン『グーテンベルグの銀河系』みすず書房、（原著1962年）

5．国際共同研究等の状況

(1) Lake Malawi Nkondo Project, Dr. Lawrence Malekano / University of Malawi-Chancellor College, Mr. George Mware University of Malawi-Chancellor College, 2003年3月の世界水フォーラムに参加した若者、子どもたちを中心として編成しつつある地域社会における水の衛生問題研究、実践のためのプロジェクト（財政支援：河川環境管理財団）。

(2) AMSCLAE, Autoridad para el Manejo Sustentable dela Cuenca del Lado de Atitlan y su Entorno. 日本ラテンアメリカ協会とアティトラン湖畔の市が共同で行っている湖沼の持続的資源保全に関するプロジェクト（財政支援：Santiago Atitlan 市、日本ラテンアメリカ協会）。

6．研究成果の発表状況

(1) 誌上発表（学術誌・書籍）

〈学術誌（査読あり）〉

特に記載する事項はない

〈学術誌（査読なし）〉

① 田中亜以子、嶺川明里、嘉田由紀子、「水問題のかげにかくれているトイレ問題－アフリカ、マラウイ湖辺、チェンベ村の事例より」、環境技術、投稿中。

② 嘉田由紀子：水環境保全と水の有効活用－世界的見地からみる下水問題と日本の経験－、かんぽ資金　簡保資金振興センター（297）、10-15頁、（2003）

③ 山本佳世子・嘉田由紀子:「湖？生きる」－湖イメージを国際的に比較する－、環境技術32(1)、環境技術研究協会、62-68頁、（2003）

④ 嘉田由紀子：環境社会学会から琵琶湖政策の100年をみる、環境経済・政策学会年報8、

環境経済・政策学会、235-252頁、（2003）

⑤ 嘉田由紀子：「京都・景観資源」の保全と創造、日本景観学会誌5(1)、日本景観学会、16-35頁、（2004）

〈報告書類等〉

① 水と文化研究会編：「世代と世界をつなぐ水の学校について（執筆担当：嘉田由紀子・小坂育子）」私たちの水　第2号（2003）。

② 嘉田由紀子：世界水フォーラム、子どもたちの報告、（京都新聞　2003年3月24日）

〈書籍〉

特に記載する事項はない

〈報告書類等〉

① 水と文化研究会編：「途上国の水問題の裏にあるし尿と人のかかわりーアフリカ、マラウイ、チェンベ村の事例からー（執筆担当：嘉田由紀子・田中亜以子・嶺川明里）」私たちの水　第3号（2004）。

② 嘉田由紀子：「チェンベ村にエコトイレをつくる」、ARDEC(29)、（財）日本農業土木総合研究所、2-5頁(2004)

(2)口頭発表

① Yukiko Kada. 3rd World Water Forum, Otsu, Japan, 2003
"Water Sanitation and Children's life in the developing countries compared with the developed countries "

② 嘉田由紀子：子ども水フォーラム「子ども水フォーラム　古都の水あそび」、子どもと川とまちのフォーラム、コープイン京都（京都市　2004年1月24日）

③ 嘉田由紀子：水と文化研究会「チェンベ村エコトイレ導入を考える」ワークショップ、滋賀県立琵琶湖博物館（草津市　2004年3月18日）

(3)出願特許

特に記載事項はない

(4)受賞等

①嘉田由紀子：子ども水フォーラムにおける淡水資源保全運動への貢献によってオムロンヒューマン大賞を受賞（2003年11月）。

(5)一般への公表・報道等

①朝日新聞（2003年3月18日、滋賀版、水の文化肌で体験、海外の若者と交流）

②読売新聞（2003年3月18日、滋賀版、わき水水路探検、新旭で）

③中日新聞（2003年3月18日、滋賀版、きれいな水、わき水に感激、海外からの子ども）

④京都新聞（2003年3月24日、世界水フォーラム、子どもたちの報告）

⑤長野日報（2003年4月16日朝刊、多くの思いと労力注いできた日本の水文化世界にー世界水フ

ォーラムを終えてー）

⑥世界日報（2003年12月26日朝刊、「し尿の循環」を若者に教育）

7．成果の政策的な寄与・貢献について

国土交通省近畿地方整備局による淀川流域委員会における河川整備計画の策定過程への住民参加制度の検討において、本研究成果である今昔写真による住民意見聴取の方法を提案し、今度の流域整備計画の基礎調査において採用された。また2003年3月の第3回世界水フォーラムにおいては、世界32ヶ国から109名の子どもたちを日本に呼び寄せ世界子ども水フォーラムを開催したが、そこでも今昔写真比較を示すことにより日本の子どもたちは、アフリカなどの途上国での水利用の仕組みが日本でも当たり前であった、という過去を知り、より親近感を持ったようだ。「世代をつなぐことが世界をつなぐ」きっかけにもなった。この企画は2004年の3月からも継続されており、2006年の第4回世界水フォーラムでも発表予定である。

文中の写真情報

写真番号	撮影者	撮影日	所蔵/出典
写真1-1	不明	昭和10年代	高島市役所所蔵
写真1-2	不明	2002<平成14>年	嘉田由紀子
写真1-3	不明	2002<平成14>年	嘉田由紀子
写真2-1	不明	昭和30年代	北川志つ子
写真2-2	不明	2002<平成14>年	嘉田由紀子
写真2-3	不明	2002<平成14>年	嘉田由紀子
写真3-1	不明	2002<平成14>年	嘉田由紀子
写真3-2	不明	2002<平成14>年	嘉田由紀子
写真3-3	不明	2002<平成14>年	嘉田由紀子
写真4-1	不明	2003<平成15>年3月	嘉田由紀子
写真4-2	不明	2003<平成15>年3月	嘉田由紀子
写真4-3	不明	2003<平成15>年3月	嘉田由紀子
写真5	-	-	出典『針江水ごよみカレンダー』
写真6	今津中学校	2004<平成16>年	今津中学校
写真7	今津中学校	2004<平成16>年	今津中学校
写真8	今津中学校	2005<平成17>年1月25日	今津中学校
写真9-1	不明	2004<平成16>年11月4日	嘉田由紀子
写真9-2	不明	2004<平成16>年11月4日	嘉田由紀子
写真10-1	嘉田由紀子	2005<平成17>年3月24日	嘉田由紀子
写真10-2	嘉田由紀子	2005<平成17>年3月22日	嘉田由紀子
写真11-1	乾清可	2002<平成14>年8月1日	乾清可
写真11-2	嘉田由紀子	2002<平成14>年8月1日	嘉田由紀子
写真11-3	嘉田由紀子	2002<平成14>年8月1日	嘉田由紀子
写真12-1	嘉田由紀子	2002<平成14>年8月1日	嘉田由紀子
写真12-2	嘉田由紀子	2002<平成14>年8月1日	嘉田由紀子
写真12-3	嘉田由紀子	2002<平成14>年8月1日	嘉田由紀子
写真13-1	不明	2003<平成15>年9月	Patricia Pellegrini
写真13-2	Patricia Pellegrini	2003<平成15>年9月	Patricia Pellegrini
写真13-3	Patricia Pellegrini	2003<平成15>年9月	Patricia Pellegrini
写真14-1	John Matewere	2002<平成14>年8月20日	嘉田由紀子
写真14-2	John Matewere	2002<平成14>年8月20日	嘉田由紀子
写真14-3	John Matewere	2002<平成14>年8月20日	嘉田由紀子
写真15-1	嘉田由紀子	2002<平成14>年8月20日	嘉田由紀子
写真15-2	嘉田由紀子	2003<平成15>年	嘉田由紀子
写真15-3	嘉田由紀子	2003<平成15>年	嘉田由紀子
写真16-1	-	-	出典『アティトラン湖　今昔カレンダー』
写真16-2	不明	2002	小林亜里
写真16-3	不明	2002	小林亜里